１．背景

ある夏の昼下がり，私は駅前を歩いていた．肌を刺すような太陽光線の下,空には入道雲が立ち昇り，遠くでセミの声が聞こえ，道路には陽炎が現れている.そんな道を歩く私が発する言葉はただ一つ「アツイ」．周りにいる人のほとんど，いや，全ての人が口に出さずとも同じことを考えているはずだ．しかし，「夏だから…」「そういう季節だから…」，と半ばあきらめて近くのデパートや商店へと涼を求め,歩みを速めていく．確かに夏は暑い．しかし，昔はこんなにも暑かっただろうか．いや，こうまでも暑くはなかったはずだ．事実，熱中症で倒れる人はいても,今のような異常な多さではなかった.実際どのぐらい熱中症が増えたのかというと.東京で熱中症により病院に搬送された人数は1996年201人だったのに対して,2005年933人にであった(1).たった10年で4.5倍に増加した熱中症.この増加率が今の暑さの異常性をさまざまと示している．

ではなぜ今こんなにも暑いのだろうか．まず原因として浮かんだのが『地球温暖化』という気温上昇の代名詞的な問題.原因はさまざまなところにあり,地球規模の問題としていろいろな対策がとられているが,まだまだ問題解消には至っていない．では，いったいどれだけ気温が上昇しているのだろうか.統計によると東京では1901年から2000年の100年間で2.9℃上昇したそうだ．しかし，原因はそれだけだろうか．他にも何か原因はないかと考え，調べてみると都市部では『ヒートアイランド現象』という問題が発生していることを知った．

２．ヒートアイランド現象とは

都市部では気温が周りの地域よりも高くなり,気温の分布図を描くと海の上に浮かぶ島のようになるため『熱の島』，英語で『heat island(ヒートアイランド)』と呼ばれることからきている．

では，なぜヒートアイランド現象は起こるのだろうか．まず考えられるのが，都市部では緑が少なくなり地面がアスファルトやコンクリートに覆われていること．そして，建築物の多くがコンクリート建築であることや,空調や自動車などの人口排熱が大量に発生していること.ビルにより遮られ風が通りにくくなっていること．これらのことにより，都市部では特に熱が溜まりやすいのに熱を逃がす術が無いという状態が生まれ,ヒートアイランド現象へと発展していく．

３．ヒートアイランド現象緩和への提案

私はヒートアイランド現象を緩和するための対応策として，以下の2つを提案する．

(1)緑のカーテン・緑のベール

都市部に一番欠けているモノ．それは都市開発と共に減少していった緑地である.ではどうやって緑地を増やせば良いのだろうか.まず浮かんだのが都市部の大規模な再開発を行うことにより，公園や広場を随所に作ること．ヒートアイランド現象の問題となる点を考慮した新たな規制などを設けることにより一度に解決を図ることが出来るだろう．しかし，これには多大な予算や時間が掛かり,倹約に努めている地方公共団体を頼りにすることは難しい.では，予算や時間をかけず，手軽に緑を増やす方法は無いだろうか．

私はそのヒントを小学生の夏休みの中に見つけた．それは，誰もが小学校あるいは幼稚園のころ体験したであろう,アサガオの観察と育成である.アサガオはヒルガオ科の一年性植物で，つる性を持っている．私がまず注目したの

は, そのつる性である. つる性の植物の特徴は, 自らの力で立つのではなく, 他の樹木などを支えとすることで高い位置へ茎を伸ばすことである. これを利用して, 少ない土地や, 通常では利用できない場所で植物を育てることは出来ないだろうか. そこで考えたのが, ビルに住んでいる人にアサガオなどのつる性の植物を配り, 育ててもらうということだ. 特に配管がすぐそばにはあるところには配管をつるが巻きつくように育ててもらう. しっかりといくつものツルが配管に巻きつくことが出来れば, 遠目ではビルに緑の筋が入ったようになり, ツタならば緑の筋がビルに入ったようになり, アサガオならば緑の上に, 所々赤や青の色がさわやかに夏を彩るだろう. また, 何本かの棒を組む, またはすだれにつる性の植物を巻きつかせることにより, 眩しすぎる太陽光線を和らげてみてはどうだろうか. 模様ではない, 生きた柄をした緑のカーテンである. 夏を感じずにはいられない.

また, 植物でビルを覆ってみるのはどうだろうか. それにはツタが最も適しているだろう. ツタの特徴としてまきひげの先端が吸盤になっておりビルの外装をつたわすことができる. これにより, 外壁を覆い隠させる. 特にツタの中でもキズタは常緑であるため, 葉が落ちてつるを露呈することが無いので特に向いているだろう. 緑のベールで覆われたビルは, 外壁のコンクリートをほとんど晒さず, 太陽光線により異常に熱を持つことも無い. また, 植物の光合成によりわずかながらも二酸化炭素の減少させることが出来る. 緑のベールは覆う場所を選ばないので, どのような建物でもできる. しかし, 緑のベールには大きな弱点がある. それは火災だ. ツタを伝って一気に燃え広がることが予想される. さらに, 緑のベールが流行してしまうとビル群全てがツタに覆われることになってしまう. すると, 都市がジャングルのようになってしまい, その都市が新たな“迷所”になってしまう. よって, 適度に調整しながら行わなければならない.

(２)屋上ガーデニング

ビルにはほとんど死んでいる場所がある. それは屋上だ. 通常, 屋上は貯水タンクや空調設備以外に利用されることは無い. そして, コンクリートがむき出しの場合が多く, ヒートアイランド現象を促進させる場所のひとつとなっている. ならばそれをどうするか. 私の結論はこうだ. コンクリートのむき出したままがダメならば隠してしまえば良い. 殺風景ならば飾ってしまえば良い. ビルの屋上でガーデニングをしてみよう.

まずは, 企業の入っているビルの場合を考えてみる. 屋上であるので太陽の光はたっぷりと降り注ぎ, 水は蛇口を作ってしまえば問題ない. 土はレンガなどでスペースを作ることにより, 見栄えが良くなるだろう. そして, 周りにベンチを置き, そこには日が当たらないよう屋根を作る. 屋上でガーデニングをすることにより, そこは植物を見ながら昼食をとりながら話をしたり, 事務仕事で疲れた眼を植物が癒してくれる, というような福利厚生の場へと生まれ変わることができるのだ. また, 住居としてのビルの場合でも屋上ガーデニングは, ビル特有の近所付き合いの少なさを解消する一手となり, さらに, 子供に水をあげさせたり, 花を見せることにより, 荒んできた現代の子供の心に良い栄養を与えることになるだろう.

では, 屋上ガーデニングに活気を与えるにはどうすればよいだろう. 市や町でコンテストを開いてみてはどうだろうか. コンテストを開く

ことにより,個々のガーデニングの美しさを競わせるのである.このとき,企業と民間で分け,さらに,ガーデニングの広さや規模で分けて募集する.企業と市民で分けるのは,コンテストなので当然順位が出てくるからである.出場するだけで企業としては緑を大切にする企業として社会的印象がよくなる.そして,より上位に着いたほうが印象良く受け止められるため,広告の一環としてたくさんの資金をかけてガーデニングを行うことが予想されるからである.広さや規模を指定するのは,合理性や工夫する点を増やすようし,レベルアップの余地を作るためである.こうすることでコンテストに,より競技的な性格を持たせる事ができるようになるのである.

屋上ガーデニングが広まれば,むき出しのコンクリートは減り,緑も増え,市民の心はより豊かになるだろう.そして花が好きな観光客を呼び込むことができ,地域活性化に一役買ってくれることだろう.

４．終わりに

さまざまなところで地球温暖化という言葉を聞き,いろいろな場所でエコというフレーズを耳にする.しかし,私たちはそれらをどれだけ真剣に受け止めているだろうか.それらは私たちのすぐそばにあり,そろそろ目を向けないと取り返しのつかないことになってしまう.いや熱中症で死者が出るようでは,もう手遅れなのかもしれない.

今回私が提案した緑のカーテン,緑のベール,屋上ガーデニングは狭い場所や無駄なスペースを有効的に使用し,実行しやすい物だと私は考える.ヒートアイランド現象にわずかながらも効果があるはずだ.だが,少ししか効果が無いと卑屈になり何も動かないというのは,とても愚かな事はだと思う.大きな問題を解決するのに一番大切な事は,小さなことでも少しずつ解決に向かうことなのだから.

私の家の前を行くベビーカー.それに乗っている赤ん坊に,私たちは,どんな未来を与えるのだろうか.

引用

(1)http://www.tfd.metro.tokyo.jp/lfe/kyuu-adv/heat_dish18-a.htm